445 Duchenne型進行性筋ジストロフィーにおける心筋ミオシン軽鎖測定の意義-心臓核医学検査による検討-

佐々木明、田谷真、下山克也、西村徹、水野春芳、
田原順雄、小野彰史、石川恭三　（杏林大学　2内）
加地英生、石原傳幸　（国立療養所東埼玉病院　内科）

DMD患者80例で心筋ミオシン軽鎖(LC1)を測定し、心筋病変との関係について心臓核医学検査(^{201}Tl心筋シンチSPECT、^{99m}Tc-RNA)を用いて検討した。LC1とCPK、およびLC1とMBとは明らかな正の相関を示した(r=0.84 vs 0.8)が、年齢と骨格筋の障害度とは負の相関を示した(r=-0.74 vs -0.78)。SPECTでのDefect Score (DS)とLVEFとは負の相関を示した(r=-0.86)。しかしDSとLC1との間には明かな相関は認められなかった。以上より、DMDにおけるLC1の測定は心筋障害の指標とは必ずしもなり得ず、また、CKの高値を示す疾患と慢性に進行する心筋疾患におけるLC1の評価には注意を要すると考えられた。

446 ^{99m}Tc－HMPAOシンチグラフィの心疾患における心筋および肺への集積に関する検討

大和田憲司、上遠野栄一、武田寛人、鉄地川原正顕、
藤田悠治、宗像志朗（太田西ノ内病院）

^{99m}Tc－HMPAOの全身および心筋シンチを施行し、心筋イメージング製剤としての有用性を検討した。

対象は心疾患12例、対照4例である。HMPAOによる全身像、心筋像を^{201}Tℓシンチと比較した。臓器分布は脳では5Hr後でも変化せず、心筋・肺では経時的に減少した。心筋の集積では正常例と心疾患例は差がないが、肺では心疾患例が高値（7.1±0.6%、9.9±2.7%）であった。Tℓ心筋シンチとの一致率はプラナー像で88%、SPECTで64%であった。肺への高度集積は肺水腫の既往例に多く肺障害の存在を示唆した。HMPAOシンチは、Tℓシンチとは異なり、心筋の灌流異常のみでなく肺障害も診断しうる検査と考えられた。

447 肥大型心筋症における^{99m}Tc-PYP心筋シンチグラムの集積に関する検討

武田　徹、飯田啓治、河野　了、鰺坂隆一、呉　勁、
佐藤始広、石川演美、杉下靖郎、板井悠二（筑大　臨医）

Tc-99m pyrophosphate(PYP)は、種々の原因により生じた壊死心筋部に集積する。本研究では、肥大型心筋症(HCM)におけるTc-99m PYPの集積状態に関する検討を11例のHCM患者（男性8例、女性3例）を対象として施行した。Tc-99m PYP静注3時間後に画像収集を行ない、集積の程度により4段階（0:集積無し、1:軽度の集積、2:肋骨と同程度の集積、3:肋骨以上の集積）に分類し、2度以上を陽性とした。

HCM症例では1度の集積45%(5/11)、0度の集積55%(6/11)で、2度以上の陽性を示す症例はなかった。1度の群で、SPECT上1-2度の中間的な取り込みを示した異常集積部位は、必ずしも心筋肥厚部位とは一致していなかった。

448 DBcAMP負荷^{201}Tl心筋SPECTによる心筋viability の評価－Tl取り込み様式による検討－

陳　若富（国立大阪病院　循）

前回AMI再灌流療法後の心筋viabilityの評価におけるDBcAMP負荷^{201}Tl心筋SPECTの有用性について報告した。今回DBcAMP負荷時のTl取り込み様式と慢性期改善度について検討した。対象は発症早期に良好に再灌流の得られた一枝病変 AMI患者17例。術後早期に安静時及びDBcAMP負荷，慢性期に再び安静時像を撮像。展開図を作成し，視覚的評価と%Defect Score(%DS)による定量的評価を行った。17例中DBcAMP負荷時欠損縮小(A)群9例，無変化(B)群4例，拡大(C)群4例で，そのうち慢性期改善例はA群9例(100%)，B群0例(0%)，C群3例(75%)と欠損拡大群でも高率に改善傾向を認めた。欠損が拡大した領域は，viableではあるが微小血管障害が存在する可能性が示唆され，viabilityの判定には注意を要すると考えられた。

449 健常者のＡＴＰ負荷タリウムシンチグラフィに関する検討

大野和子、大島恵介、梶原顕彦、神取祥和、堀　浩、
加藤高美、綾川良雄、宮田伸樹　（愛知医大　放）
東　直樹、（同　中放）　伊藤尚雄、脇田康志
（同　３内）

日本人の Bull's eye normal map の作成を目的として、健常ボランティア３０名を対象としたＡＴＰ負荷による^{201}Ｔｌ心筋シンチグラフィを実施し、既存の normal file（ＧＥ社製）と比較検討した。

過去４年間の健康診断で、循環器、呼吸器系の検査項目（血圧、脈拍、心電図、胸部単純Ｘ－Ｐ）に異常の見られなかった３０代～５０代の男性（各年代１０名づつ）にＡＴＰ（0.24 mg/Kg/min）を５分間持続静注し、１５分後より撮像を開始した。既存の normal file による診断に比し、病変部の局在診断がより明らかとなった。

450 ATP負荷タリウム心筋シンチグラフィの老年者における有用性と副作用

渡辺圭子、木下信一郎、鈴木成雄、岩瀬留美江、進藤　晃
村松俊裕、土肥　豊（埼玉医大　二内）
西村克之、宮前達也（同　放）

ATP負荷タリウム心筋シンチグラフィは運動負荷が困難な高齢者の非観血的診断に有用と考えられる。そこで、検討例を65歳以上のA群42例とそれ未満のB群40例に分け、冠動脈病変診断能および副作用につき検討した。A群/B群の順に、感受性90%/77%、特異性50%/83%、accuracy 83%/80%であった。副作用はA群の69%、B群の81%に出現した。内訳はA群/B群の順に、胸痛55%/51%、紅潮感17%/37%、頭痛11%/4%、ST低下17%/15%、房室ブロック6%/4%、血圧低下が6%/3%であった。診断能、副作用とも両群間に大きな相違はなかった。全ての副作用は投与中止後2分以内に無治療で軽快した。以上の結果より、ATP負荷は老年者においても確実かつ安全といえる。

Presented by Medical*Online